

うしまじぞう 浮き島地蔵

その昔、鬼怒川のほとりに芦沼村大
中なかというところがありました。この辺
りは、大水おおみずが出るたびに田畑たはたや幼子おきなごが
流ながされたといわれていました。

ある年の秋としのこと、大きな台風たいふうがや
つてきて連日れんじつ雨が降り続つづき、

鬼怒川上流きぬがわじょうりゅうの五十里湖いかりこが決壊けっかいし、大中おおなか
は一面水いちめんみずにつかり人馬じんばは流ながされ、田畑たはた

は泥どろに埋うずまってしまいました。ところが、不思議ふしぎなことなんに水みずの上うえにポツンと立たって

るものがあつたのです。よく見るとそれは何と石いしのお地蔵様おぢざうさまだつたのです。
こんな大水おおみずにも流ながされなかつたお地蔵様おぢざうさまに、村人むらびとたちは、

「こりや、何と運なんの強つよい地蔵様おぢざうさまだんべや。このお地蔵様おぢざうさまは、きつとおらあたちを守まもつて
くれるありがてえお地蔵様おぢざうさまにちげえねえな。」

と驚おどろきながらも、しげしげとお地蔵様おぢざうさまの姿すがたを拜おがんだのでした。
やがて、このことが近隣きんりんに知れ渡わたり、誰だれいうとなくこのお地蔵様おぢざうさまを『浮き島地蔵』と



浮き島地蔵

呼ぶようになりました。

ある日のこと、このお地蔵様の側を通り掛かった、へそまがりの旅人がおりました。旅人は、この辺りの村人にお地蔵様の話を聞き、

「そんな馬鹿げた話はあんなめえよ、第一石の地蔵様が浮くわけあんなめ。」

と、ポンポンとお地蔵様の頭を叩きながら大笑いし、村人を馬鹿にしました。

その日も暮れかかり、旅人はこの地の民家に一夜の宿をとりました。ところがその夜、この旅人は高い熱が出て頭が割れるように痛みだしたのです。

そして、くる日もくる日もその痛みがとれなかったのです。このことを知った村人たちは、

「ありや、お地蔵様を馬鹿にしたので、そのたたりにちげえねえぞ。」

と、口々にささやいていました。さすがに、そのへそまがりの旅人も不安になってしまいました。あまりにも旅人の病が治らないことに、宿の主人も心配していましたが、村人のうわさが耳に入り、

「客人、もしかして、あの地蔵様を馬鹿にしたんではあんなめいな？」

とたずねると、旅人は、

「ううん、そういわれれば、そんな気がするな。あんなときのことかな？」

と、頭を両手でかかえこんでしまいました。

旅人は、宿の主人に諭され早速お地蔵様のところに行きました。

「お地蔵様や、馬鹿にしたおらがわるかった、かんべんしろや。」

お地蔵様の前にひざまずき、何度も何度も頭を下げたのでした。するとどうでしょう。あれほど痛みのひどかった頭痛がみるみるうちに治ってしまっただではありませんか。後日、村人はこのことを旅人から聞き、

「このお地蔵様を馬鹿にしちやなんねえぞ。ばちがあたっからな。」
と、今まで以上に信仰を深め、大切に守ったということです。

それから、この大中では洪水による災害等がなくなりました。現在でもお地蔵様には、赤い帽子や前掛けが掛けられており、人々の暮らしを見つめているのです。